

あやまち

屋敷で、夕餉をよばれた後、安珍は、清重に別れの挨拶をした。

食後のこうした時間には・・・清重の膝の上には、いつものように、赤い小袖を着た清姫が抱かれている。いつものように清次が憎まれ口をたたく・・・。

あたりまえの・・・自然な・・・幸せな風景・・・本当に、こうやって、家族の一員のように扱ってもらっているのが、安珍は嬉しい・・・しかし、甘えているばかりでは、いけないと思う。

「あまりの居心地の良さに・・・長逗留してしまいました・・・。

明日、出立いたします。未明のうちに出発いたしますゆえ、ご挨拶は、出来ぬと思います。お許し下さい。」

「なんだ、もう少し、ゆつくりは出来んのか？」

清次が言う。

「いえ、明日には、湯川につきたいと思えますゆえ・・・。」

「そうか・・・引き止めすぎて迷惑をかけたのお・・・申し訳なんだ。

帰りには、寄ってくれるのじゃろう？」

清重は少し、寂しそうだ。

「はい、そうするつもりであります。」

「そうか・・・じゃが寂しくなるのう・・・のう、希代・・・。」

膝の上の清姫は、何も言わない・・・ただ、黙ってうつむいている・・・。